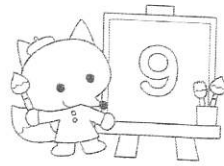


さんむまのりあ通信

2026年



長い夏休みも終わり、いよいよ2学期！ ママたち、お疲れさまでした(^^)

それぞれの事業所で夏祭りやイベントなどを開催しました。お楽しみいただけましたか？ お子さんたち、ママたちの笑顔と出会い、職員たちも頑張った甲斐がありました。たくさん参加して下さい、ありがとうございました。



ママたちと話している時、「診断をつけるか、つけないか？」「診断をつけることにはどういう意味がある？」という話題で盛り上がりました。知能検査は数値でIQ70以下が知的障害とされ、数値で表されます。自閉症やADHDに関しては数値が出ない。スペクトラムというだけあって、グラデーションになっています。なので「傾向がある」という言い方をしますし、以前はよくボーダーということばも使われていました。ママたちはどう思いますか？ 自分の子どもには、はっきり診断をつけて欲しい、いや、診断は受け入れられない。それぞれの性格や価値観で意見の分かれるところだと思います。さまざまな発達検査がありますが、どれも皆、はっきりとした診断を出すものではありません。お子さんの得意、不得意分野や、発達の傾向を知る手がかりとするものであったり、苦手分野に関して必要なサポートを考えるためのものであったりします。

わたしは、必要な時期に診断がつくことをお勧めしています。なぜかというと、療育の現場で出会い成長し大人になった数多くの卒業生たちから教えられたからです。上手くできないことで落ち込み、自分

を責め、苦しい日々だったけれど診断がついたことで、「人と同じようにできなくても良いじゃん」「自分だって頑張っている」「人は人、自分は自分」と思えた、と異口同音に教えてくれたからです。その診断はいつか？ とのタイミングか？ はそれぞれの成長過程で違っています。

まのりあ創立したての頃の話ですが、発達障害（今は発達神経症）がテレビで大きく取り上げられた時期がありました。嫌でも子どもたちが目にします。それを逆に生かし、伝えるなら今でしょ！ と当時のママたちが奮起したのです。さりげなく本をテーブルに置いてみたり、わざとチャンネルを合わせてみたり、聞こえるようにママ友と電話する等々。結果、子どもたちがまのりあに来て、子ども同士で「オレたちってADHDだよねぇ」などと確認し合うようになりました。そうして子どもたちが20歳になった時、保護者会で診断を受けた時期や薬を服用することで楽になれたことを話してもらったこともあります。

診断がついたことで「ふっさけた。楽になった。」という声をよく耳にします。「どうなんだろう??」と揺れている時期が一番しんどいかもしれません。「診断がつきました。」と報告してくれるママたちの表情はとても明るく、自信にみなぎっています(^^)

そもそも！ 自閉スペクトラム症やADHD、その他もろもろの診断を持つ子どもたち、大人になった人たちの何と多いことでしょう。同じタイプの子どもはおらず、それぞれの個性が輝いています。わたしは、まのりあに通ってくださる子どもたちが大好きです。

